住郡中人なきがごとし、やみがたくて其由をおほやけにもうつたへ、さてと云なる由をこまやかにふれければ、やう〳〵にして民も歸りけり、是は狐のしわざよとて、其年は藥の沙汰もなくて事過けり、又の年になりて物頭の勇壯なるが申けるは、さきには狐のたゝりとて、藥をも調せられざりし、府下に居侍る狐の所爲とて、數代調せられたる藥の絶なんも、君威の薄きに似候間、某に命せられ候へ、狐狩してさやうの類こらしめ申べしと申ければ、然るべしと有て、まだ其事の外にはしれざりけるに、ある朝第一の重臣中川何がし、口の事有とて物頭の許に來しかば、渴仰して亭に請じ、さていか樣の御事にやと申しかば、わどのがむかしそゞろなりし事共、法の極にしがたき事共也、此書付を見て申披あるべしと一通を渡しければ、是を見るに、まだ若かりしより、年ざかりにてわかげにて有し、あやまちを書つゞけたり、ひらき終て云やう、是は皆わかき頃の血氣にて、しぞんじたりしあやまちども也、只今の事にてはなく候へども、申ひらくべき樣なしと答ければ、さらば切腹候へとの命なり、とく〳〵と有ければ、力およばぬ事なり、その用意いたすべし、しばらく御待候へとて奥に入て、此由を妻子に告ければ、驚入て思もよらぬ事にあひ、歎き悲事限なし、かくて早く事おへぬべし、沐浴の湯わかせよとて、其よそひするうちに、家のうちこぞりて、兎角の事はわかたず、絶入ばかりなりけるに、湯を燒く下部の亭の庭を見やるに、塀の上にあまたの狐、かしらをならべて睨居たり、亭のかたをむきて、今や〳〵と云に、供にありける士、手をふりていまだしと答けり、此よしを見付て、急ぎ主人にさゝやきければ、是を聞てさこそあらめ、此上は立出て使者を切捨、もし事違なば、其時こそ我ともかくもならんと獨言して、今こそ自殺し侍らめとて、亭へ出ければ、はや其氣を知けるか、悉く逃失けり、頓て此よしを申て、山々を狩して多く狐をとりければ、何事もなくてやみけり、

〔泊酒筆話〕一橘枝直（はじめ爲直といへり、後枝直とあらたむ、）は、いとますらを心たくましき本性にて、いさゝかもめ